

「一つ一つの種に」

「コスパ (コストパフォーマンス＝費用対効果)」、「タイパ (タイムパフォーマンス＝時間対効果)」という言葉はすっかり日常化しました。何事も効率重視。動画や音声を二倍速、三倍速で鑑賞する人もいるといいます。また、何か施策を講じれば、早急に結果を出すことを求められます。短期間で結果が出なければ、すぐに新たな「何か」を始めなければなりません。

そのような社会にあっては、「希望」を保つことは非常に難しい。大きな夢や希望を語ることが恥ずかしいことのように思われるからです。「今はまだ時ではない。しかし、将来、必ず」という決意は、もはや立志伝中の物語にしか出てこないのかもしれませんが。

「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う」(マタイによる福音書 13:44)。イエスが語られた時、人々は畑に隠されているという宝をどのようなものだと思像したでしょうか。現代なら間違いなく、「金塊が」「希少な宝石が」と想像する人がほとんどでしょう。宝とは即時的で即物的なものだと思っているからです。もちろん、イエスの時代にもそのような人たちはいたでしょう。

けれども、畑に埋められている宝はそのようなものだけではなかったはず。時が経過して芽吹き、花を咲かせ、実をつける。そのような宝を想像した者たちもいたのではないのでしょうか。

周囲からは「何の価値もない」と思われるような畑を購入して、「その日」が来るのを心待ちにする。目先の利益に囚われず、ひたすら「良いもの」を求める(「御顔を隠されれば彼らは恐れ／息吹を取り上げられれば彼らは息絶え／元の塵に返る。」詩編 104:27、「どうか、あなたの民を正しく裁き、善と悪を判断することができるように、この僕に聞き分ける心をお与えください。」列王記上 3:9)。このような姿勢こそが、神の国を待ち望む信仰者の姿勢として相応しいのです。なぜなら、神もまた「その時が来るまで待つ」方だからです。

もし神が即時的なものだけを求める方ならば、イスラエルの歴史を「待つ」ことなく介入されたでしょう。一瞬で効果を発揮したいと考える方だったならば、イエスを「大人として」誕生させたでしょう。しかし、神は決してそうされませんでした。イスラエルがどれほど神から離れようと立ち帰る時を待ち続けられました。イエスは赤ん坊の姿でこの地上に誕生されました。そして、時が満ちるに至って神はその民に、その歴史に介入され、「全ての者を救う」との約束を実現してこられたのです。

「あなたが蒔くものは、後でできる体ではなく、麦であれ他の穀物であれ、ただの種粒です」(コリントの信徒への手紙一 15:37)。パウロはそのことがわかっているから、「今すぐ救いを実感したい」と願うコリントの人々に「即時的な結果だけを求めるのではなく、『その時を待つ』ことが大切だ」と説きます。神を信じたといって、日常生活が劇的に変わるわけではありません。洗礼を受けたからといって、その瞬間に世界が違って見えるわけではありません。畑に種を蒔いて水をやり、世話を続けているうちに芽吹きを迎えるように、信仰生活も日常の積み重ねなのです。

そして、その繰り返しの後に、「神は、御心のままに、それに体を与え、一つ一つの種にそれぞれ体をお与えになります」(コリントの信徒への手紙一 15:38)。一人ひとりの信仰生活は、一つ一つの種が違った実を結ぶように、一人ひとり違った形で救いが実現していきます。種によって実を結ぶ時期が違いうように、信仰者一人ひとりが救いを実感するタイミングも違います。その意味において、信仰生活は「コスパ」も「タイパ」も悪いと言えるでしょう。

しかし、即時的、即物的な願いでは叶えられない安心と幸せを日常にもたらしてくれるのもまた信仰生活です。「今はまだ時ではない。しかし、将来、必ず」という希望こそが、私たちをこの世の困難に立ち向かわせる唯一の力だからです。

神は私たち一つ一つの種がそれぞれ実を結ぶ時が来るのを待っておられます。その時が来るまで、真摯に、愚直に種を世話し続けようではありませんか。

